

人生100年時代のシニア人材活用

わが社自慢のシニア人材は60歳からのキャリアを応援 取材執筆 馬場雅子

仕事にも、地域交流にも前向きなシルバー人材センターで働く女性が増えているのか？

前号では「女性会員の拡大」等で活路を開くシルバー人材センターの取り組みをレポートしたが、東京のベッドタウンでもある東京都狛江市にある「狛江市シルバー人材センター」は、そうした女性シニアの活躍が目覚ましいセンターの一つ。今回は、女性会員は前年比10.6%で全国でもトップクラスの同センターの取り組みと、そこで活動し、仕事と趣味に意欲的な一人のシニア女性会員にスポットをあてる。

仕事がないければ「創る」

前号で紹介した全国シルバー人材センター事業協会の話でも、シルバーボンスと呼ばれる女性会員の活躍は年々顕著で、全国の各センターでもその傾向が見られるという。「現在、会員数は704人です。特に女性会員の伸びに勢いがあり、数年間で1.6倍に増えました。4月には入会説明会を3回も開催しました。嬉しい限りです。」そう語るのは、近年、女性会員

数の増加が顕著な狛江市シルバー人材センターの池田あけみ常務理事・事務局長（以下、池田氏）。

全国平均の男女比は2対1のシルバー人材センターにあつて、なぜ、狛江市のセンターでは女性会員の伸びにそれほどの勢いがあるのか。

「狛江市は都心から離れたベッドタウンであり、地元で働くための事業所や生産拠点はとても少ない町です。町の中に就労場所が少なく、いざ働こうと思っても、なかなか仕事は見つからない。ならば

男女別会員数の推移

	平成29年3月末	令和3年4月末	増加率 (%)
男	347	441	127%
女	165	263	159%
計	512	704	138%

図表 狛江市シルバー人材センターの男女別会員数の推移

そのマイナスをプラスに変えて、仕事がないのなら、自分たちで知恵を絞って仕事を創ろうと。そこからですね。次々とアイデアが生まれ、新しい仕事も生まれていったのは」と、池田氏は振り返る。

ピンチをチャンスに変える

狛江市シルバー人材センターの特徴、そして多くの女性会員が活躍する「元気の源」は、このマイナスをプラスに変えられるパワーにあると思われる。池田氏も「マイナスがあるから、モノを考える力が湧いてくる」と力説。数々の難関を乗り越え、多くの仕事を創り出した同センターだけに、そ

の言葉には説得力がある。

また、こんなエピソードもある。アイデアを生かし、新しい商品を開発したが、それを宣伝するだけのお金もない。すると、どこからか「他にない珍しいものなら、新聞社も興味を持つだろうから紹介してあげるよ」という助け舟。「ならばメディアに取り上げてもらえるような話題性があり、絶対にどこにもない、注目されそうなものを考えようと思いましたね」

と、池田氏は笑う。

その一つが当センター独自のイージーオーダーである。9号から15号サイズまでサンプルのスカートやチュニックを制作し、お客様には、ご自分でお気に入りの生地をお持ち頂き、オリジナルな1着を制作している。また、ユニークなところでは葬式の入棺時の白装束からヒントを得て、シンデレラ風のケープも発案。最近ではコロナ対策の一環で、布製のオリジナル

マスクを制作し、狛江駅前などで販売している。

「マスクはテレビでも紹介されて評判になり、かなり売れました。また、ポスターやチラシなどは、職員が知恵を出し合い、自分たちでデザインや制作を行うことで、実費は印刷代だけというコストパフォーマンスも実現しています」と池田氏。今年に入ってから毎月第二金曜日、「FM狛江」という地域のラジオ番



狛江市シルバー人材センターの池田あけみ常務理事・事務局長（右）と会員の横山よし子氏

バイタリテイの源とは

「できること、可能性があれば積極的にチャレンジする」というバイタリテイの源はどこにあるのだろうか。

「語弊があるかもしれませんが、すべてに恵まれていることは不幸だな、と私は思っています。お金はないよりある方がいいとは思いますが、お金があると何もしなくても生きていけるため、誰とも話さず孤立してしまう高齢者も多いと思います。」

仲間との楽しいお喋りやコミュニケーションは、自分一人じゃないんだということを気づかせてくれます。当センターの多くの会員から、そういった嬉しいお声をいただきます。ともに助け合って、仕事も協力し合い、地域のために働く。そして収入も得られる。積極的なチャレンジは、自分のためだけでなく、他の会員のためにも変えるパワーが生まれる。そこは

健康寿命を伸ばす働き方につなげる

新しい仕事の創造は、新しい女性会員の増加にもつながった。

池田氏は「保育事業を新たに始めたことで、急激に女性会員が増えました。その後も生活支援事業やポスティング事業などを次々と展開してきましたが、ポスティングの仕事はさらに会員の年齢幅の拡大にも寄与しました」と言う。

狛江市のセンターでは、100歳でポスティングの仕事に携わる会員もいる。ポスティングの仕事は、外に出て、一軒一軒の家を歩いて回る仕事であり、シニアの健康増進にも役立っているが、効果はそれだけではない。

「同じお宅に重複してチラシを入れないように、配る家は事前に下見しておきます。確認したら地図にチェックを入れて、気をつけて配る。身体だけでなく、頭も使いますので、健康寿命を伸ばすことにもつながるのではないでしょ

シルボンヌ（女性会員）インタビュー

横山よし子氏

（狛江市シルバー人材センター会員）

「社会の役に立つ喜びを『仲間と分かち合える』のが幸せ」

出かけるときは、必ずきちんとお化粧をして、身だしなみを整えてから、という横山よし子氏（以下、横山氏）。「周囲から見られても恥ずかしくない姿」を心掛けている。体を動かすことが好きだという彼



地域の交流の場にも積極的に参加。「多摩川いかだレース」。令和元年7月の29回大会では、男性会員の「元気号」（写真右）が優秀企画賞、女性会員の「和（なごみ）号」が企画賞を受賞した

地域との交流深めるイベント参加

地域との関わりを大事にしている同センターでは、地域の交流の

うか」と、池田氏はその副次的な効果にも期待を寄せる。

場にも積極的に参加している。その一つに「多摩川いかだレース」というイベントがある。

「毎年、職員と会員が企画書を作り、創意工夫を凝らしたいかだに参加するレースです。令和元年7月に行われた29回大会では、センター男性会員の「元気号」が優秀企画賞、女性会員の「和（なごみ）号」が企画賞を受賞し、W受賞となりました。

「元気号」に乗せた楽器類は、すべて紙の手作りで本物そっくり。クリエイティブ性も高いものであり、年々、参加者の間では「シルバー恐るべし」という雰囲気になってきました。他にも地区ごとの盆踊り大会への参加など、仕事だけではない、地域との関わりにも意欲的なシルバーパワーに圧倒されることもしばしばです」。

長く仕事を続けてもらう秘訣

現在、狛江市シルバー人材センターの会員の平均年齢は75・8歳。最高齢は前述のポスティング業務などに携わる100歳の男性だ。人生100年時代どころか、職業

女は、74歳という高齢ながら、背筋をピンと伸ばし、颯爽と歩く姿からはシニアというイメージは薄い。今できることを精一杯やっているという横山氏に、シルバー人材センターに入ろうと思ったきっかけについて尋ねると。

地域のことを知りたいという想いに目覚めた

毎日働くことや会員との交流が楽しくて仕方がない、という横山氏に、シルバー人材センターに入ろうと思ったきっかけについて尋ねると。

「狛江市に住んで55年になります。これまで地域のことや周りのことを考えたことはありませんでした。子育てをしながら、30代半ばに始めた社交ダンスに夢中になり、40年間、ずっと続けています。その間、狛江シルバー主催のヘルパー講習に参加して資格を取得し、介護関係の事務所で働いていました。70歳の定年を前に、これから自分に何かできることがないか探していたときにシルバー人材センターのことを知りました。当時、シルバー人材センターはお掃除や



地区ごとの盆踊り大会への参加

人生100年時代を実現。入会した会員が定着し、長く仕事を続けられる理由とは何なのか。センターとしての取り組みに秘訣があるのだろうか。

「事務局がやることは仕事を即、ご紹介することです。新会員になられたすべての方に、すぐお仕事を紹介するぐらいの勢いでやっています。入ってすぐ、それこそ説明会にいらして会員になられた段階が一番大事です。すぐに仲間になつていただけるような環境作りでしょう」と池田氏はアドバイスする。

実際、仕事がすぐに紹介され、仲間意識が醸成されることで、入会後に退会される会員は大きく減



社交ダンスを教えていたこともある横山氏は、センターのダンスクラブにも意欲的に参加している

草刈りの仕事をやっているところ、というイメージを持っていました（笑）。でも説明会に参加して、センターに抱いていたイメージも大きく変わり、これから自分がやっていきたいことや考え方が一緒だったので、すぐ会員になろうと決めました」。

やりたいこと、生き甲斐が必ず見つかる

センターでの仕事やこれからやっていきたいこと、常日頃心掛けていたことなどを横山氏に聞いてみた。

「それまでやっていた仕事を綺麗に辞めて、センターだけの仕事に専念したのが8年前になります。現在の日課は、朝4時に起床して、

少するという。

「一致団結して乗り越える。この気持ちの共有もシニアにとってはとても大切だと考えています」。

その一致団結して乗り越える気持ちは、現在のコロナ禍においても会員の間で共有されている。

「シニアの場合、家の中に閉じこもってばかりいるのは、逆に健康に良くない面もあります。感染防止に備えながらも、皆さんと一緒に集まり、楽しく会話し、自宅にいるのとは違った雰囲気や和気あいあいと過ごせる。そうした安全な環境を一緒になって創り出していく工夫もシニアだからこそ大事です」。

今回、ご紹介させていただいた女性会員の横山よし子さんは、ダンス歴も長く、地域の人たちに社交ダンスを教えていただくなど、お仕事以外にも元気に、前向きに活動をされているシルボンヌの一人です」。

池田氏はそう語り、女性会員の横山よし子氏を紹介してくれた。横山氏へのインタビューから、仕事や趣味、そして地域との交流にも前向きなシルボンヌのワーキングライフを少しでも伝えられれば幸いである。

メイクをして、身なりを整えてから出かけます。一般家庭での家事支援やシルバー人材センターの清掃業務を週に4日間ほどやっています。出勤日を決めて働くことができるので、他の行動計画を立てやすいことが気に入っています。

シルバー人材センターの会員になつて、とてもよかったと思うことは、女性としてこれからは何ができるのか、何をしたらいいのかを一緒に考えてくれること。時間的な余裕もできて、余暇には大好きな社交ダンスも楽しめる。世田谷区の区民センターや南部地域センターで、社交ダンスを教えていたこともあったのですが、コロナで休止となっています。今は、センターのダンスクラブに参加しており、皆さんが生き生きと練習して楽しんでるのを見ると、自分も頑張らなくてはと思います。先のこととは分かりますが、今日自分ができることをしっかりやって、90歳や100歳の先輩会員を見習って、仲間と一緒に地域に貢献できたら嬉しいと思います」。